

アイ・ウォーク死せず

小森 星児（復興塾塾長）<s-komori@maia.eonet.ne.jp>

悲惨な事故や大災害が起こると、「この記憶を風化させてはならない」と訴える識者がかならず現れる。その心情は分からないでもないが、自分は忘れないというならともかく、忘れることが罪悪であるかのような押しつけがましさに思わずたじろいでしまう。

どういうわけか、こうした発言は恨みや悔恨と結びついていることが多い。「入学式の感激を風化させない」とか「結婚式の喜びを風化させるな」という祝辞の効能は、式場を出たとたんに雲散霧消してしまうのが常である。学業モチベーションを4年間保ってくれる薬があれば大学の教師も楽なものであるが、3年保てば一安心という仲人の悩みに比べると甘いかもしれない。

閑話休題。最近のサブプライムローン破綻を契機とする金融不況は、バブル破裂後の混乱のリプレイ的様相を呈するが、ここでも記憶の風

化を警告する声はほとんど聞こえてこなかった。むしろ人びとのバブルの記憶は「今度こそチャンスに乗り遅れるな」であったり、「赤信号みんなで渡れば怖くない」ではなかったかと思われる。フランスの哲人が喝破する通り、われわれは未来に後ろ向きで進んでいくが、欲と2人連れであることを言い落したのではないか。

ところで、「時の審判に俟つ」という格言がある。

そこには記憶が薄れるのを当然のこととして受け止めると同時に、消してはならないその意義を歴史に昇華させる透徹した史眼が求められている。兵庫県が実施した「検証」に欠けていたものといえれば思い当たるかもしれない。

それはさておき、間もなく14回目の震災記念日が巡ってくる。兵庫県では、この日にメモリアル・ウォークを実施しているが、これまで平日であったため、われわれアイ・ウォーク残党組とは一緒になったことがない。しかし、来年は週末に当たるので一般市民でも参加が可能である。ただ

し、この日はセンター試験の初日でもあるので、やはりこれまで同様、われわれは前の週の日曜日に集まることにした。

しかし、問題は日程だけでない。メモリアル・ウォークはその名称が示すように追悼行事である。確かに犠牲者を悼み、辛い記憶を蘇らせることは必要であろう。し

こうべ(あい)ウォーク 2009のご案内

第1回こうべ(あい)ウォークから10年。来年も市民活動へ寄付(募金)して歩きます。

- 年 月 日 2009年1月11日(日)
- スタート 大国公園(JR 鷹取駅南東)
受付時間 9時30分～10時30分
- ゴール 御蔵北公園(予定)
受付時間 11時～12時

主催/こうべ(あい)ウォーク 2009 実行委員会
(特)しみん基金・KOBÉ、神戸復興塾、(特)神戸まちづくり研究所

かし、それだけでは足りない。われわれが取り組んだアイ・ウォークは、震災を契機に広がった市民活動を精神的にも資金的にも支援するアドヴォカシーの試みであった。残念ながら、市民による、市民のための復興という課題の解決はまだ見えてこないが、神戸復興塾は設立の理念を次の世代に受け渡す重要なイベントとしてアイ・ウォークを継続することを提唱したい。

復興塾・まち研メンバー紹介「群像2」

群像 「僕の前に、道はない」

森栗 茂一（神戸まちづくり研究所理事、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）

< kurimori2007@maia.eonet.ne.jp >

菅原で瓦礫撤去を始めて、十三年目。語り部キャラバンで向島に乗り込んだ。ウォークで走りまわった。市場の町を巡って毎月レポートを書いたことも、地蔵盆を支援し続けたことも、震災体験現地交流プログラム、そして、くるくるバスから乗り場インフォ三宮…。まち研あればこそ、動きをさせていただいた。単科大学独立法人の語学先祖がえりクーデターで場所を失い退職願望。お遍路に出たら、外大のほうに先に大学やめて、吸収合併。外国語学部を出てコミュニケーションデザイン・センターに今いる。で、お遍路公共交通会議？

先日、四谷の土木学会で、「えらいとこまで来てしまった」なあと、講演の途中でふと思った。震災の3日後、まだくすぶっていたまちを彷徨したとき、関わろう、いや、やばいことになると思いつつ、うっかり関わってここにいる。どこまで行くのだろうか。民俗学はどこに置いてきたのだろうか。コミュニケーションデザイン、住民協働型と正当化してきたが、まとめるのは難しい。人の不幸や困難をまとめて、もっともらしく飯の種にするのも性に合わない。

求められるまま、動いてきた。ときどき、動いたことを考察してきた。勘違いでやたらほめる人がいるかと思えば、嫌われることもある。でも、ぼくは僕で行こうと思う。今も昔も、まちの声に耳を傾け、まち人の思いと一緒に、できることを一生懸命考える。そして、ときどき、冷静にまとめあげるような、そんな現場力のある教育者になりたいと思う。

研究？ なったらなったでいいけど、求められた



ら、やってもいいか。人生 54 年目。
僕の後ろに、道は出来る。

群像 「日々のニュースに接して」

磯辺 康子（神戸新聞社記者）

< isobe-ys@kobe-np.co.jp >

マスコミという仕事柄、
事件や事故、災害のニュースに日々接している。

毎日毎日、よくもこれほどの事件・事故が起きるものだと思う。新聞やテレビで報道されるのは、発生したうちのごく一部だ。ひつたくり、路上強盗、痴漢、車上荒らし…。その多くは新聞の地方版にさえ掲載されない。

10 年ほど前、アメリカでしばらく暮らした時、治安の悪さを実感したが、今や日本もそう変わらないのではないか - と思う。夜の一人歩きは、いつひつたくりに遭うか分からない。外出先から戻り、ドアを開けた途端、家に押し入られることもある。痴漢など日常茶飯事。教員が教え子を襲うことも珍しくない時代だ。

治安の悪いアメリカでピリピリして過ごすのは辟易したけれど、自分の身を守るために教えられることも多かった。例えば、職場にある立体駐車場の上階に車を止め、帰りが夜遅くなる場合、日没までには車を地上に移動させる。多くの人が帰宅し、がらんとした駐車場の上階は襲われる危険性が高いからだ。そして、車を駐車するときは外から見える場所に物を置かない。小銭でも危ない。小銭のために車を壊すことを何とも思わない犯罪者も少なくないからだ。

そんなことを考えなければならぬ社会は異常だと思う。しかし日本ももう、その域に達している。だからこそ、「安全・安心なまちづくり」と多くの人が口にするのだろう。そんな言葉が必要のない社会になればよいのだけれど。



群像 「過去の経験を未来につなぐ」

菅 磨志保(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター)

< sugam@cscd.osaka-u.ac.jp >

阪神・淡路大震災がご縁で、災害(減災)とボランティア(市民活動・NPO)という研究テーマに取り組んできた。現在、大阪大学に新設された「コミュニケーションデザイン・センター」に所属し、大学院生を対象とした副専攻プログラム(講義・演習)を企画・提供すると共に、災害の各局面(応急対応・復旧・復興・予防・減災)に役に立つ調査研究、地域防災活動との連携事業等を行っている。



先月、昭和 50 年に大水害に襲われた青森県黒石市の温湯(ぬるゆ)地区を訪問調査する機会を得た。少子高齢化が進むこの集落も、当時は集落の住民が協働で壊れた家を修理し、仮の住まいまで建てていたという。こうした集落内の協働は、災害時だけでなく、通勤通学のために豪雪の雪道を踏み固める、老親の介護など、日常生活の様々な場面で行われてきた。お話をしてくれた元・公民館長さんが、帰り際にこんなことを言っていた「介護保険制度ができてから、みな『サービスを受けなければ損』という認識が出来てしまっただけでね…。少子高齢化という「見える」部分だけでなく、人々の意識の中にある行政サービスに対する考え方の変化も、集落の生活に少なからず影響を与えていることが伺えた。

「災害は社会の仕組みを可視化する」と言われるように、災害を通じて制度や組織の隙間で取り残された問題や、制度化に伴う認識の変化に気づかされることがある。過去の災害の経験を将来の災害への備えに生かしていくために、また現在の社会問題をより深く考えていく上でも、災害という側面から問題を捉え、考えていくことの意義を

感じている。過去の経験を未来につなぐコミュニケーションについて考えていきたい。

群像 「こんにちは。長田区在住の三谷真(みたにまこと)です。」

三谷 真(神戸まちづくり研究所理事、
関西大学商学部准教授)

最近、学生と商店街へ出かけて、イベントの企画や実施のお手伝いをしています。先日も、尼崎の夏祭りでは三和本通商店街にて焼きそば、フランクフルト、生ビールの販売などを二日間やってきました。かなり忙しくて、たくさん売れました。学生たちにも分配金があるので、喜んでやっておりました。



商店街は相変わらずどこもしんどいですが、三和の場合は、イベントもそれなりに定着をしてきて、商業者もそれなりにやる気を出し始めています。イベントが店の売り上げに繋がればもっとやる気になるのですが、そこがなかなか難しいところです。

学生たちと商店街でのフィールドワークを始めてから、私自身も全国のいろんな商店街やまちを見に行くようになりました。地方へ出張時には必ず商店街を回ります。たくさんデジタル写真を撮ってきます。それを講義や講演で使うのです。

つい先日も、宮崎市へ行ってきました。中心市街地活性化法の基本計画が認定された都市ですが、やはり中心部から少し外れると、空店舗が目立ちます。地方都市はなかなか大変です。もちろん県庁も見えてきましたよ。夜は焼酎バーで宮崎の



芋焼酎を堪能してきました。地酒と食は地方へ行く楽しみのひとつがです。いや、ひとつというより全てというべきか。

ほぼ全国を回りました。まだ、行けてないのが沖縄です。ああ、泡盛が私を呼んでいる、、、

群像 「ナダタマ」

慈 憲一（ナダタマプロジェクト）

< postmaster@naddist.jp >

現在 ナダタマ
(<http://www.nadatama.com>)という灘区ポータル(?)サイトをベースに灘区内「のみ」で活動しておりますが、今力を入れているのが摩耶山です。



摩耶山、登ったことありますか？六甲連山の中でも豊かな自然と歴史を誇る山なのに、昨今の「山離れ」であまり登られてないのは地元灘クミンとして大変寂しいかぎりです。若い世代にもっと気軽に山を楽しんでもらおうと3年前から「摩耶山

リュックサックマーケット」というイベントを毎月第三土曜日に山上で開催しています。元々芦屋の高座の滝登祥の山の上で行うフリーマーケットみたいなものを摩耶山に暖簾分けさせていただきました。

みたいなものを書いたのは、モノの売買が目的ではなく、いかに山で楽しく過ごせるかがキモだからです。出店者はリュックサックに入れて持って来たモノを媒介にしている人々となつがっていきます。そこはゆったりとした空気が流れ、山のサロンのような状況が生まれています。この一風変わった「フリマ風ピクニック型サロン」は口コミやブログなどで広がって、おかげさまで神戸のみならず関西一円、関東からも来ていただけるようになりました。従来からの中高年のハイカーも最初は目を白黒させていましたが、今では新しい山のイベントとして認知していただけているようです。一方、山上への公共アクセスとしての摩耶ビューラインの存続が危ぶまれているようです。僕らの山は僕らで守る、灘クミンとしてなにかアクションを起こせないか思案中です。



神戸復興塾

勉強会報告

● 5月勉強会

「自治体ぐるみの住民協働交通まちづくり計画 - 山口市交通まちづくりから地域公共交通総合連携協議会まで」 森栗茂一氏（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）

萩原 正五郎（神戸復興塾）

< hagiwara.shogoro@obayashi.co.jp >

5月7日の勉強会は、「交通街援隊講座その1」として森栗茂一さんより、山口市における交通まちづくりの報告が行われました。

山口市では平成13年から導入されたコミュニティバスの赤字と既得権化等に始まる公共交通の破綻に対して、著者を含む各界や事業者、公募市民委員からなる交通街づくり委員会を立ち上げ、その答申のもと、市民交通計画が策定されました。

この計画の手法は、「市民が創り育て、事業者がノウハウを提供し、行政がサポート・調整をおこない協働すること」、「公平に交通サービスを与えるのではなく、機会公平・情報公開で公正に公募し、やる気があり主体的に取り組む地区から支援すること」であり、整備方針としては「基幹交通

は行政と事業者、コミュニティ交通は市民主体で整備、その結節点の乗継円滑化は行政の課題」になります。さらに、それをより現実的に進めるため、「クルマに頼りすぎない暮らしに転換する」多様な試み（バス優先レーン、バス半額券、パーク＆ライド等）と、コミュニティタクシーの適正な運行のための社会実験がおこなわれました。

今回のキーワードは「公正にやると、結果公平になる」、この真理を痛感しました。

最後に土井勉さん（神戸国際大学）より、明解で適切なコメント「負のスパイルからの脱却のために―事業者、行政、住民の取組の仕組みづくり、収益向上策」をいただきました。

● もう一つの 5 月勉強会

「G8 神戸環境大臣会合を契機に考えよう：地域発！環境にやさしい低炭素のまちづくり」

5 月 1 日に田浦健朗氏と恩田怜氏をお招きして、G8 神戸環境大臣会合が世界と地域に持つ意味や市民参加についてお聞きしました。

● 6 月勉強会

「都市のエコロジカルデザイン - 歩いて楽しいまちをめぐる神戸と京都の対話」

恩地惇氏（GK-Kyoto 取締役相談役）

野崎 瑠美（遊空間工房）

< rumi-nozaki@u-kukan.com >

6 月 24 日（火）夕方より、「都市のエコロジカルデザイン」歩いて楽しいまちをめぐる神戸と京都の対話、と題して、ギャラリー島田での火曜サロンの一環として塾の勉強会が開催されました。ゲスト講師は、（株）ジイケイ京都の取締役相談役・恩地惇氏。恩地さんの人生観とも重なって、ゆったりとした心穏やかな時間を過ごしました。メインテーマは、京都四条河原町での社会実験について。京都市と市民、商業関係者などで構成する「歩いて楽しいまちなか戦略推進協議会」が、2007 年 10 月 12 日～14 日の 3 日間、四条河原町

から四条烏丸間でトランジットモール実験を行ったもの。四条通りの 2 車線を歩道にして、マイカーを締め出した実験は、予想通りの効果を生み、歩いて楽しむ街を体感できたようです。



（写真は資料からの転載です）

今回の実験が成功したことに、いくつかの特徴があると感じました。プロのデザイン事務所が関わっているだけに、実験という仮設にも拘わらず、おしゃれでデザイン性に優れて計画されていたこと。歩道敷設の床材、ベンチ、ガードレールなど木や紙が中心で、視覚や触覚にやさしいこと。学生や街の人々を巻き込んで、ものを作るという充実感を共有出来たこと。普段は人通りが多く買い物が出来ないほどの狭い歩道が広がり、ゆったりと歩くことで買い物がし易くなったこと、などです。特に商店街にメリットがあることが証明されたことは、実現に向けての加速と、他の地域への波及が期待出来ると感じました。

また「方丈有理」という恩地さんのエッセイに書かれた暮らし方からは、今私達に求められている価値観を問う生き方にまで話が及び、「遠くを見る目」という言葉が強く印象に残りました。

2008 年度神戸まちづくり研究所・神戸復興塾総会報告

神戸まちづくり研究所 2008 年度通常総会が 5 月 27 日（火）にコミスタこうべにて、正会員 28 名中 25 名（出席 9 名、委任状 16 名）の出席で開催されました。

議長に大津俊雄氏、議事録署名人に小林郁雄氏と野崎瑠美氏を選出し、借入金について / 2007 年度事業報告および決算報告 / 2008 年度事業計画および収支予算 / 2008・2009 年度役員の 4 議案とも、質疑の後全て承認されました。役員人事

では、監事の島田誠氏が任期満了で退任され、新たに松原永季氏が就任されました。

質疑では、事業に関する会員の交通費の扱い、寄付を求めるコンセプトの明確化、役員構成は経験・年齢、性別を考慮すべきなどの意見が出されました。

引き続き、神戸復興塾の総会が塾生 41 名中 24 名（委任状 15 名）の出席で開催されました。事業報告 / 決算報告 / 事業計画 / 予算の全議案とも承認されました。

活動報告¹

『中間支援には多様な形がある』

野崎 隆一（神戸まちづくり研究所理事・事務局長）<ryuichi6384@gmail.com>

5 月 27 日の総会が終わり、平成 20 年度のまち研の活動も大方の輪郭が現れてきました。それにしても、行政の契約の遅れには毎年ハラハラさせられどおしです。今年度の特徴は、大半の事業が継続事業であるということでしょう。アドバイザー派遣のように、アドボカシーで始まった事業が成果を評価され安定継続しているものもあれば、明舞やグラスパーキングのように複数年度にわたって中期的に取り組まなければならない事業も抱えてきたということなのでしょう。また新たに増えてきた地域団体向けや行政職員向けの研修も、アドバイザー派遣や明舞団地再生のような現場に根ざした中間支援ではありませんが、当初に掲げたコミュニティシンクタンクとしての側面が評価され始めたのかもしれない。

■ 調査研究・研修

平成 18 年度から兵庫県県の委託事業として行っている「グラスパーキング推進事業」は、今年度も予算の縮小はあったものの、ほぼ同じ内容で取り組む予定です。自治体からの研修依頼では、神戸市灘区の自治会リーダー研修（6/20）と明石市からの自治組織リーダー研修（7/26）があります。また、協働のまちづくりを推進中の明石市では、自治基本条例の制定を控えて市民とのコミュニケーション力をつけるための職員研修プログラムを作成し実施について依頼がありました。

■ 市民活動・まちづくり支援

NPO 等育成アドバイザー事業は、今年度公募となったが、結局他の NPO の応募が無くまち研で引き続き受託することが決定しました。2 年目となる小規模作業所サポーター制度は、手探りの試行的な 1 年を経ていよいよ実施の段階に入りました。

明舞団地の再生まちづくり支援も県委託費では不足、見切り発車で支援を継続しながら助成金の申請を検討していました。このほど平成 16 年度にも再生アイデアコンペで支援を受けたハウジング＆コミュニティ財団から助成を受けることがほぼ決まりました。昨年並みとは行きませんが、昨年芽生えた活動（お助け隊、お母さんのためのホットスペースなど）の芽を絶やすことなく育てていきたいと考えています。

■ 交通まちづくり

「乗り場インフォ三宮」のまちづくり会社による本格運営が始まります。バス事業者からの負担、バナーの収入などまだまだ予算を許さない状況ですが、まちづくり会社の力量を見守るしかありません。まち研の事業としては、今後もめまぐるしく変わることが予想される「乗り場マップ」の更新があります。また、内閣府に申請中の「元気再生事業」が決まればモビリティセンターの試験的運営などの新事業が展開されます。

活動報告2 『地域のCSRセミナー in 神戸・兵庫 報告』

CSR プロジェクト in 神戸・兵庫 2008 実行委員会 委員長 山地久美子

神戸まちづくり研究所は本年度から CSR (Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) に関わる新たな取り組みを始めることとなった。今後、CSR = 「コミュニティ (Community) の社会的責任」として、自治体、企業、各種団体とともに、地域として様々な取組を広げ、つなぐための活動を推進したいと考えている。

その第1弾として、去る7月29日(火)午後、「地域のCSRセミナー in 神戸・兵庫」を神戸市勤労会館の多目的ホールにて開催した。このセミナーは日本財団がインターネット上で展開する「CANPAN CSR プラス」事業と連携する形で神戸まちづくり研究所が主催しており、北海道から九州まで全国12カ所で同様の地域に根付いたCSRセミナーが開催されている。

神戸・兵庫セミナーでは80名近い参加の中、一部にて基調講演とリレートーク、二部ではポスターセッション形式で企業・学校など9社



の協力により多様なCSRの取組が紹介された。第一部では、田村太郎氏(ダイバーシティ研究所代表)が基調講演の中で多様な事例を紹介しながら「地域での『面』での展開を」と呼びかけた。続くリレートークでは、4名[森栗茂一氏、島田誠氏(アート・サポートセンター神戸代表)、藤田治氏(NPO法人フードバンク関西理事長)、山下英之氏(ひょうごボランティアプラザ 事務局長)]がそれに応えるかのように、それぞれの立場、活動から事例報告を含めて様々な提言を行った。参加者による質疑応答ではCSR活動への期待、齟齬や矛盾の解決方法など具体的な質問が寄せられた。

第二部では、環境、労務、教育、社会貢献など

様々なCSR活動に取り組んでいる兵庫9社のポスター展示と紹介が行われた。終了後には交流会が開催され、出展企業・団体関係者、参加者



との情報交換の場となった。人々が活発に交流する様子を目の当たりにし、このような活動を通じて地域のつながりをつくっていくことの重要性を改めて認識した。

● 出展 企業・団体 ●

バンドー化学(株)、(株)コウベ・プレシウス・パール、(株)ヒロメディカル、(株)神戸風月堂、(株)神戸まちづくり、神戸村野工業高等学校、住友ゴム工業(株)、港建設(株)、みなと観光バス(株)

今回の神戸・兵庫セミナーは神戸経済同友会と共催の形で開催の運びとなり、当日には森井章二氏(神戸経済同友会:企業と社会の新しいあり方委員会委員長)にお越しいただいた。初めてのCSRセミナーを開催するにあたり神戸商工会議所、兵庫工業会、兵庫県経営者協会より後援団体として有形無形の支援をいただいた。ここに記して、出展企業・団体の皆様、関係各位に謝意を表します。

なお、地域セミナーの様子は日本財団のCANPAN プラスホームページ上(http://blog.canpan.info/csraward_2008/category_5/)において詳細に記載されているので参照されたい。日本財団の「CANPAN CSR プラス」との連携事業については次号にて紹介させていただきたい。

CSR プロジェクト in 神戸・兵庫 2008 実行委員会

委員: 相川康子、野崎隆一、森栗茂一、山地久美子(委員長)
事務局: 川村憲之、東末真紀、田中聡

特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所・神戸復興塾

〒651-0076 神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号 TEL: 078-230-8511 FAX: 078-230-8512

E-mail = LET07723@nifty.ne.jp Homepage = <http://www.kobe-machiken.org/>

まち研ニュース 15号

1980 年にはじまった日本の「まちづくり」

小林 郁雄（神戸まちづくり研究所理事長）<ikuo-ko@kcc.zaq.ne.jp>

「まちづくり」を考える時、我が国での転機は 1980 年（昭和 55 年）である。都市計画法が改正され、地区計画制度が導入された年である。神戸市では、都市景観条例が前年（1979 年）に、まちづくり条例が翌年（1981 年）に制定されている。約四半世紀前のことである。

1978 年に神奈川県知事長洲一二さんが「地方の時代」を世界 10 月号に発表し、時は民間活力活用・小さな政府、地域が主体となる社会への傾斜が急であった。「まちづくり＝地域における、市民による、自律的継続的な環境改善運動」のはじまりを告げる時代であった。「市街地整備のための環境カルテ」が神戸市で策定公表（1978 年）され、地域からのまちづくりとして都市計画を考えることを、基礎自治体において真剣に取り組みはじめた頃であった。



英国ではサッチャー政権が 1979 年にはじまり（～1990）米国ではレーガン大統領が 1981 年に政権に着いた（～1989 年）。日本では中曽根民活内閣が少し遅れて（1982～87 年）始まった。英米日と肩を並べて、高度経済成長以後の新たな社会経済の仕組みの構築を目指していた。政府主導・中央集権から民間活力・地域主権への転換である。都市計画から「まちづくり」への転換でもあり、NPO・ソーシャルエンタープライズの登場でもあった。

英米がその後、その路線を法制化し、社会的にも一般化していったのに対し、日本では 2001 年の小泉改革内閣の突然の成立を待たねばならなかった。その主因は日本経済バブルである。日本の「まちづくり」を 10 年（20 年かも知れない）遅らせたのは、我が国の経済バブル期（1986～1991 年頃）とそれに続く空白の 10 年と言われるバブル経済崩壊後の停滞経済社会情勢といつてよい。86 年頃からのバブル景気は、地道な密集市街地都市環境整備への取組み、すなわち、まちづくりへの取組みを、東京発の地上げ軍団があざ笑ひ、バブルがはじけた後は、ひたすら縮小ちぢみ指向に、まちづくりどころではない、ということとなった。

そうした時代の流れの中で、絶妙な時期に阪神大震災は起こったのである。まちの再生・復興まちづくりに向けて、これまでの都市計画行政ではにっちもさっちも行かない。それでも、これまでの都市計画法制の特例で対応しようという復旧・復興方針のなかで、二段階都市計画決定という、言い訳じみたそれなりに巧みな（既存システムを守りながら、市民まちづくりを組み込んでいく）方式を、行政も非行政も納得していくことになった。

振り返って、1980 年の頃の「まちづくり」への取組み、コミュニティカルテから環境カルテ、CRP（Community Renewal Program）ころがし方式、住宅地区更新事業・住環境整備モデル事業など、といった様々な当時のキーワードが想い出される。法的対応、事業的な組み立て、住民参加システムなど今から考えても、コンピュータやインターネットなどの技術なしに、いろいろと深い検討をしたものであった。しかし、当時の思考外であった「主体」へのアプローチ不足が、全ての敗因であったかもしれない。それが今、私がまちづくり NPO の理事長を、無理矢理している原因であることを、白状する。